

平成30年度 第1回発達障害者支援地域協議会

日時：平成30年9月6日（木）10：00～11：35

場所：発達障害総合支援センター 研修室

出席委員（10名）

朝日 雅也 委員
丸木 雄一 委員
鈴木 郁子 委員
竹田 由香里 委員
村上 由美 委員
新井 幸恵 委員
酒井 正博 委員
枝久保 達夫 委員
安留 忠臣 委員
久保 久仁子 委員

欠席委員（4名）

神田 佳明 委員
石川 和夫 委員
田坂 翔太 委員
田畑 康治 委員

1 開会

（1）あいさつ（発達障害総合支援センター 渡辺副所長）

副所長の渡辺でございます。本日は今年第1回目の地域協議会にご出席いただきまして、どうもありがとうございました。昨年度は診療・療育体制について、皆さまにいろいろご意見を賜りました。地域協議会では一つ一つテーマをこれから挙げて、皆さまからいろいろなご意見等を賜っていきたいと思います。

今年度のテーマといたしましては、発達障害者が日常生活や社会生活を送る上で必要なライフステージごとの支援をテーマにしております。発達障害のある方が成人期になったときに、いろいろな自立の在り方というのはあると思うのですが、日常生活や社会生活で自立していくために必要ないろいろな能力ですとか、技能が必要になってくると

思います。子どものときの支援機関、学齢期の支援機関、成人期の支援機関というふう
に、ライフステージごとに支援機関は変わってくるのですが、そこをつないでいくとい
うことは非常に重要なのですが、その上で、その先にある自立するために何が必要なの
かということを考えながら、やはりつないでいくということも大切かなというふうに思
いまして、今回これをテーマに挙げさせていただいております。

成人期になって、その人その人が、その人らしく生きていけるような在り方のために、
どのように支援をしていくかということで、皆さまからご意見を賜りたいと思いたすの
で、よろしくお願いいたします。

議論を進めるための一応きっかけづくりとして、きょうはジョブセンター川越の伊藤
センター長から就労支援機関として成人期に必要なスキルについてお話をいただきま
す。次に、ボイスマネージ代表の村上委員から、当事者として、支援者として、家族と
して必要なスキルについてお話をいただきたいと思っています。その貴重なご報告を基
に議論を深めていければと考えておりますので、よろしくお願いいたしますと思いたす。

地域協議会は関係者がいろいろ集まって情報を共有することで、地域の実情に応じた
支援体制について協議をする貴重な機会でございます。委員の皆さまには、それぞれ
のお立場から専門的なご意見をいただくとともに、活発にご議論をいただければ幸い
でございます。

それでは、今日はよろしくお願いいたします。

(2) 新任委員紹介

- ・委員交替のお知らせ
 - ・新藤委員、小暮委員の退任
 - ・丸木委員、石川委員の就任

2 議事

(1) 議題についての説明

(司会)

次に、議事に移らせていただきますので、朝日会長にお委ねしたいと思います。こ
れまで副会長であられました新藤委員が退任されましたので、空席となりました副会長
の選任も併せてお願いしたいと思っております。

お手元の資料1番、協議会設置要綱の4の(2)をご覧くださいますと、副会長は会
長が指名するというふうに規定されてございます。副会長の指名およびこれからの議事

の進行につきまして、朝日会長にご依頼したいと思います。よろしくお願いします。

(朝日会長)

おはようございます。会長を務めさせていただいております、埼玉県立大学の朝日でございます。継続されている委員の皆さま、またご交代されました委員の皆さま、あらためてよろしくお願いしたいと思います。

まず、副会長の指名を行いたいと思います。丸木委員さんに副会長をお願いしたいと思いますが、皆さま、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

(委員全員拍手)

それでは、特にご異議等なくご承認いただけたということで、丸木委員さんに副会長をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

議事を始める前に、1点ご報告がございます。本年度から本協議会につきましては公開とさせていただきます。詳細につきましては事務局からご説明をお願いしたいと思います。

(事務局)

2つポイントがございます。まず次回から協議会を原則公開し傍聴を受け入れたいと考えております。2番目でございます。議事録につきましては今回の協議会分から公開の扱いとさせていただきたいと考えております。以上でございます。

(朝日会長)

事務局からご説明いただきましたが、委員の皆さま方、よろしいでしょうか。

今回はこのことを、今ご承認いただきましたので、次回から公開等のご案内をさせていただくというふうにご理解いただければと思います。

それでは、次第に従いまして議事を進めてまいりたいと思います。11時35分という、ちょっと細かい刻みでございますけれども、2回程度の協議会でございますので、どうぞ活発なご審議、ご意見をいただければと思っております。

それでは、先ほどごあいさつの中にもございましたが、本年度の議題、発達障害者が日常生活や社会生活を送る上で必要なスキルについてでございます。まず、事務局からご説明をお願いしたいと思います。

(事務局)

資料の2をご覧くださいませでしょうか。本年度、本協議会で掲げます議題につきまして、発達障害者が日常生活や社会生活を送る上で必要なスキルについてというふうにいたしました。

この議題を提出した目的でございます。2をご覧くださいませればと思います。読ませていただきますと、発達障害のある方は、人とのコミュニケーションの苦手さや、独特のこだわりなどにより、社会で自立する上でさまざまな課題を抱えていらっしゃる。特に日常生活場面、社会生活場面で求められる生活スキルをどのように身に付けていくのかが大きなハードルとなっているということでございます。

本年度は発達障害のある方が日常生活や社会生活を送る際に、成人期までに身に付けておきたい生活スキルの習得に向けて、各ライフステージで提供できる支援機関の支援についてご提言をいただきまして、本協議会として取りまとめを行いたいというふうにご考えてございます。

事務局からの取りまとめの青写真ですけれども、下の3の枠囲みのところに載っております。導入部がございまして、2番がその生活スキルについてでございます。(1)として、生活スキルはということで定義をさせていただき、(2)で、その生活スキルを身に付けるために、どのようにして支援機関のほうで支援をしたらよろしいかということ、幼児期、学齢期、成人期のライフステージごとに取りまとめていきたいというふうにご考えておりますので、活発なご議論、ご意見、よろしくお願ひしたいと思ひます。以上です。

(2) 基調報告

(朝日会長)

ありがとうございます。それでは議題の趣旨等についてはご理解いただけましたでしょうか。

それでは、早速次の議題に移りたいと思ひます。基調報告ということで、きょうはお2人の委員さんに順次お願ひすることになっております。発達障害者が日常生活や社会生活を送る上で必要なスキルについて、日頃から発達障害のある方の就労支援に関わっていらっしゃいますジョブセンターの視点からご報告を、伊藤センター長さんにお願ひしたいと思ひます。

スクリーンを使われるということでございますので、それぞれ自席か、あるいは見やすいところに移動させていただきます。

①埼玉県発達障害者就労支援センター（ジョブセンター川越）

伊藤センター長からの報告

ジョブセンター川越の伊藤と申します。よろしく申し上げます。では、ちょっと座らせてしゃべらせていただきます。

発達障害の方、私たちは発達障害の方に向けて就労というところで支援をしているのですけれども、その就労という場面において日常生活とか、社会生活を送る上で、いろんな必要な生活スキルというのがあると思いますけれども。

今回報告させていただくのは、私たち、基本的には相談という形で発達障害の方に向けて支援を続けているのですが、その中でほぼ共通というか、最終的にどの部分に対してフォーカスして相談に乗っているかみたいなところを、ちょっとピックアップして報告させていただくような形になっています。

正確にデータを取ってまとめているわけではないので、いろいろと違うところがあるのかもしれないのですが、大まかにこのようなところにフォーカスをしながら相談を進めているという意味で捉えていただくと幸いです。

就労をする上で課題というか、そういったところですね。就職に向けて相談に来られる方、また働いている中で難しさを抱えて相談に来られる方、もっと言うと部下が発達障害っぽいというところで上司が相談に来られる方、いろんな方が私たちのところに相談に来るのですけれども。

大まかに皆さんはこんなところで困られているのかなといったところです。

特に、最初にもあったように、コミュニケーションといったところで、なかなかうまくいかなかったりといったところもまずあります。最終的と言ったら変なのですが、感情コントロールのところ、結構働いていく上ではかなり大きなウエートを占めているような気がしています。

感情コントロールがうまくいってれば、いろんな作業ミスであったり、コミュニケーションがうまくいかなかったりというところがあるのですが、周りの人たちが理解していただいている状況であれば、何とかやっけていけるような印象を持っています。最終的に感情が爆発してしまって、周りの人たちに怖がられてしまうとか、そういった状況に陥ってしまうと、どうしてもそこの職場から離れざるを得なくなってしまうという方が多いような感じを持っています。

そういった意味では、コミュニケーションといったところがうまくいなくて、最終的に爆発してしまったりとか、入社しなくなってしまうとかいった形を取られる方が多いような感じを持っています。

コミュニケーションのところでは、まず意思の伝え方ですね。ご自身の考えであったりとか、想いであったり、要求であったり、そういったところも伝え方といったところがなかなかうまくできない方が多いのかな。相談に乗っていても、私たち、一番最初にやるのが、やっぱり相手の考えであることとか、伝えたいことを整理しながら聞いていくといったところが一番大事になっているような気がしています。

そういった意味で、まずご自身、いろんな思いを持って、いろんな考えを持って、話しているときも考えながら話していたりしますので、その思いに従って順次言葉にしていくと、なかなかまとまりがないという伝え方が出来上がっているような感じを持っています。

まず、そういった意味では事前に自分の考えを整理するといったところが大事なのかなという視点を持っています。ただ、自分一人で自分の考えを整理することというのは、まだ難しい方もいらっしゃるのかもしれないので、そういったところに支援が必要な方もいらっしゃるのかな。ご自身でいろんなツール、表だったり、グラフだったりとか、そういったものがうまく使えるような方ですと、ご自身で整理できる方もいらっしゃいますし、そうじゃなくて、誰かが整理しながら聞いてあげることが必要な方もいらっしゃる感じを持っています。

今度は他者の意思の捉え方ですね。今までの経験が偏っていた、個性なのかちょっと分からないのですけれども。ご自身の経験といったところがやっぱり基準になって、それに合わせた形で思い込みが発生してしまっているという方が多いような感じがあります。

ゼロか1かの考え方であったりだとか、職業能力評価もやっているのですけれども、文章を1行、たった1行の文章を読んで再入力するだけなのですけれども、その中でもご自身の経験に沿った形で思い込んでしまって、単語を間違えて入力してしまうといったところが見取れます。そういったところでは、やっぱりいろんな形で思い込みがあるのかなと思っています。そういった意味では、実際の他者の意思と異なる形で捉えてしまって、それがきっかけでコミュニケーションがうまくいっていないといった形になってくるかなと思います。

あと、不安ですね。不安への対処と書いてあるのですが、そういったところでコミュニケーションがうまくいなくて、いろんな形でうまく、作業を失敗してしまったりだとか、他者とけんかになってしまったりだとかという経験が増えてくると、その経験を基にいろいろなことを判断して、また失敗をしてしまうだとか、そんな不安が大きくなって、今度は行動に移せないという結果が出ているような気がします。

皆さん、いろんなやりたいことをいっぱいやります。進みたい方向もあるけれども、見えている方、見えていない方がいらっしゃるのですが、まず第一歩は何をしていいかわかる方もいらっしゃいます。ただ、その第一歩が踏み出せない。その踏み出した結果、失敗してしまう。誰かに何かを指摘されるかもしれないとかいった形で、第一歩が踏み出せない方がいらっしゃいます。そういったところで、やっぱり不安の対処といったところが働く上で課題になってくるのかなと捉えています。

これ以外、細かいところはいっぱいあるとは思いますが、大まかにこんなところをよくテーマに相談に乗っているような感じになっています。

就労する上での自立。これがいいのか悪いのかは分かりませんが、ただ、一つ私たちが働いていく上で、会社さんの意見を聞いたりだとか、いろんなところを聞いているのですが、まず自分で考えて、自分で決定して、自分で行動して、その結果をどうにかたちで見たか、まず結果を自分で受け止めるといったところが基本なのかなと思っています。

それができなくて、情報が整理できなくて、考えることができなくて混乱してしまう。支援を受けて整理をできると、いろんな考えが浮かんで行動ができたりとかといった方もいらっしゃいます。今度、また先ほどの不安といったところでいろんな不安が発生して、決めることができない、どうしたらいいですかという問いになってくるといった形ですね。

そういった、どうしたらいいですかという問いを会社の人たちに投げ掛けると、やっぱり会社の人たちも忙しいですので、なかなか答えられない。こういう形でやっていいですかという問い合わせをすると、それだったらやっていいよと、ここの部分はこうしたほうがいいよとかというアドバイスをもらえるようになるのですが、どうしたらいいですかという問いを投げ掛けたとき、会社の人はどうしていいかわからなくなってしまう。

こういったところで、まず自分でいいのか悪いのか分からないけれども、こういうやり方を決めるといったところが大事なのかな。その上で相談をしていくといったところが大事なような気がしています。

行動ですね。決定事項をどうするか。結果もうまくいった、うまくいかなかった、中途半端に終わってしまった、いろいろあると思います。ただ、やっぱりゼロか1かの捉え方であったりだとか、ほとんどがうまくいったのに、ある1カ所だけ指摘を受けたからやっぱり失敗だったみたいなのも受け止め方とあって、それがまた不安へとつながっていくのかなというふうに捉えています。

そういった意味では、まず自分で考え、行動をした決定事項を下し、結果を受け止める。ただ、そこの自分の苦手さ、この過程の中で自分の苦手さというのは必ずあると思いますので、その分というのを、まず自身で知っていただく。その部分については、やっぱりサポートを受けながらだったり、ツールを使いながらみたいところがうまく回せていけるとストレスも減り、感情コントロールもうまくいくのではないかという捉え方をしています。

そういった意味では、まず考えるといったところです。まず課題として見えているのが、情報がなかなか整理できないといったところになってくると思います。情報の整理がなかなかうまくいかずに、混乱をしたまま考えるため、何も考えられず、結局どうしたらいいですかということになっているのかなと。

もう1つ、視野だったりとか、思考を一定の過程の中で、かなり狭い範囲で物を見ていたりだとか、事実を捉えたり、あとは考える範囲もかなり狭かったりということ、あとは乱雑さとか、あれを考え、これを考え、全然関係のないところを考えみたいところで、考えがまとまらないとか、固定しないところがあるため、まとまりがないというような感情を持っています。

決定事項をどうするといったところで、失敗への不安ですね。考え方の硬直性といったところがやっぱりあるのかな。こうでなければいけないといったところです。実際に会社で働くのはかなり自由なのだと思いますが、学校なんかよりもかなり自由で、いろんなやり方ができる。そのやり方、会社に提案して、いい形であれば会社は採用するし、あまり良くなければ不採用だったり、また改善して、改善のアドバイスをもらって一部が採用されたりとか、いろいろな形があるはずですよ。そういった意味では、硬直的な考え方というよりは、もっと自由にいろんなことが考えられると、より良いとか、ストレス的のところは減ってくるのかなと思っています。

ただ、なかなかこの硬直性といったところはなくならないところがあるので。1つの方法だけという形だけではないはずですよ。2つ、3つは考えられたりとか、2つ、3つのストーリーを考えられたりということではできるような感情を持っていますので、複数の選択肢といったところを必ず準備できるような支援を受けたり、いろんな考えをやってみたいといったところがあるのかなと考えています。

結果を受け取るといったところです。先ほど、冒頭から説明しているとおり、受け取り方の偏りといったところがどうしてもあるのかなと。

ただ、分からないのですが、やっぱり経験に沿った形での受け止めという印象を持っています。いじめられたことのある経験が多い方ですと、人の言うことが必ず自分をしかる

ことみたいなイメージで捉えちゃっている方が多かったです。この経験の偏りというのがあるのかなと感じを持っています。こういった意味では訓練みたいなところで、失敗をしてもリカバリーが利くとか、やり直しが利くんだみたいな、成功体験がすごく大事で。成功していくのもすごく大事なのですけれども。

私は、最近訓練を見ていて、失敗していくことも大事なのかなと思っています。ただ、失敗をするのもコントロールされた環境、就労一本みたいなところですとコントロールされた環境ですので、そんなコントロールされた環境の中で失敗して、やり直しをして、リカバリーしてといったところがうまくいき始めると、こういった受け止め方の偏りみたいなところが減ってくるのかなと思っています。

もう少し詳しく書いてはありますけれども。しゃべっちゃっておかないと。情報の整理のところで、やっぱり整理をする視点が定まらないといったところが大きいです。そういった意味では情報が混乱するといったことになっています。図表や視点を可視化して固定することで、かなり考えが進む人がいます。相談をしながら、基本的には口頭で相談をしています。協議・指摘という形で、その場で書いてもらうだけでも、かなり話が進んだりします。視点を固定することで、その視点が見える状態にして、その視点に沿って思考を進めるといったことが全然できる方がいっぱいいらっしゃると思いますので、表を使ったり、図を使ったりみたいな形で面談を進めるのが有効な方法なのかなと思っています。

その図表が、ご自身で使えるようになると一番いいのかなと思っています。こういった意味では、図表がいろんな形で、いろんな場所で訓練があったり、生活の中といったところでうまく入れ込めていくことで、自分の考えが整理できるような形が取れると一番いいのかなと思っています。

整理している視点を、他者と相談しながら視点を決める、視点を表にするといったところがありますが、やっぱり視点を決めるときも、なかなか自分の中でうまくいかなかったりしますので、そういったときの支援者でもいいですし、友達でもいいですし、同僚でもいいですし、こんな視点で考えていこうかといった話をできるようになっていくといいのかなと思っています。

視野と思考の狭さとか、乱雑さについてです。先ほどの図表を使って全体像を使ったり、全体の中での位置付けをつかんだりとか、前後関係といったところの確認をしていくといったところです。視野が狭いだとか、思考が狭いということを、なかなか広くするのは難しいのかなと思っていますので、そういった意味では外部の要因、頭の中だけで処理をするのではなくて、外に書き出して、それを見直しながら処理をしていくこ

とで、全体像を見つめ直したり、位置付けを考えたりだとか、前後関係を考えたりだとかいったことが大事になってくることです。

そういった意味では、全体像を書き出すときには、やっぱり偏ってしまう可能性もあるので、そういったところで、他者の力を使いながらや、重複や漏れがあるのかなといったところを他者と相談しながら、といったところが大事になってくるような気がしています。

失敗への不安です。決定事項をどうするといったところで、先ほどからも説明しているのですが、失敗後のリカバリーの可能性について、やっぱりお仕事をすると、必ず成功しなきゃいけないわけではないです。失敗の中から、数多くの失敗の中から1個の成功が生まれてくるわけですので、必ず失敗をします。失敗をしてもリカバリーできることがいっぱいありますので、その経験といったところをいっぱい積んでいただく。知っていただくというところが不安の対象といったところにつながっていくのかなと。

そういった意味では、まずは失敗をしてもこうなってしまうだとか、この程度で終わるのではないかみたいなりストアップも事前しておくのが大事なのかなと。あとは成功、失敗のシナリオを他者と相談しながら、いろんなシナリオを考えることで行動ができるようになってくるのかなと思っています。

結構そんな話が、特に働いている人ですね、働いている人の相談の中で、やっぱりこういうことをやろうと思っているのだけれども、といった相談をすることができないと言うのですが、じゃあ、相談をして実際にどうなるのと言っても、そんなのは駄目だと言われる。駄目だったらどうしたらいいといった話をしたりとか、そうじゃなくて、他の言われ方の可能性もあるよねといった話を結構したりしています。

考え方の硬直性といったところでは、なかなか硬直性に対する支援はやっぱり難しいと思っています。いろいろな形で相談に乗ってきましたが、その硬直性を解くことは難しいのかなと思っています。ただ、100%全部を、全てをやってしまおうと思ったときに、やっぱり1つの仕方しか浮かばないとか。ただ、ポイント、ポイントで段階ごとに区切って、1個のシナリオかもしれないけれども、その結果に従って次の段階があるみたいな形で、区切っていくことによって調整箇所に至った、調整ポイントに至ったところを細かく区切っていくことによって、結構いろんなシナリオが考えられるということが、可能性も出てくるのかなと。

やっぱり大きなこと、1つのことをちゃんと相談に乗ってこられるのですが、そこを一つ一つ、まず第一歩といったところを考えて、いろいろなことを相談しながら、まず第一歩といったところで進めていく。その次、こうだった、このやり方だよね、こうだ

ったらこのやり方だよねみたいな相談に乗っているのが多いような感じを持っています。

そういった意味では、こういった変更可能な場所をしっかりと決めて、複数のシナリオを相談しながら準備をしたいといったところです。

やっぱり想定外の出来事はどうしてもありますので、必ず相談できる場所を固定しておくといったところが大事になってくると思います。

受け止め方の片寄りといったところです。結果をもたらした、いい結果であれ、悪い結果であれ、外部要因だったり、内部要因だったり、結構すべてを外部要因にしてみたり、全てを内部要因、自分の責任だみたいなことにしてみたりとかありますので、自分だけの責任でもないし、他者だけの責任でもないし、この部分は相手だよね、この部分は自分の努力が足りなかったよね、みたいなところを明確にしていく整理といったところが大事かなと。

できていた分、できていない部分についても同じようにやって。失敗時、この部分、こういうやり方だったらうまくいくかもしれない。今からでもこういうやり方でリカバーが利くかもしれないといったところと一緒に整理していくといったところが大事かなと思っています。

今まではちょっと大まかに、どんな形で支援、相談に乗っているかといったところを説明しました。最後に簡単にまとめてみたのですがすけれども。スキルといった観点で。困ったとき、まず困ったことに気付くといったところが大事なように、なかなか気付かずにそのまま素通り、自分が困っているのか困っていないのか、特に考え方の硬直性の強い方ですと、もうこうやるべきだみたいなところで困っているとは思わずに突き進んでしまったりみたいなところがありますので。やっぱりチェックポイントみたいなところを決めながら、振り返ってみたりといったところが大事かな。そこで困ったところに気付いて、サポートを求め、相談をするところが大事になってきます。

予定等の変更を調整する。本当に世の中何も変更できないみたいな言い方をされる方が結構いらっしゃるのですが、かなり変更は利くはずですよ。特に会社ですと、いろんな変更はしょっちゅうやっていますので、その変更が利く、世の中の柔軟性がもっと高いのだといったところを知っていただくのが大事かなと思っています。

今まで相談に乗ってきた内容を説明してきたのですが、全てが結局自分で自分の情報を整理したりだとか、結果を振り返ってみたりだとか、事前の準備ですね、人に説明する前に自分の考えを少し整理して、5分でも10分でもいいから整理してみましょと、箇条書きでもいいから書いてみましょみたいなところで、事前の準備ができることに

よって話がうまく進んだり。

事後ですね、相手が何を言っていたのか、少し考え直してみましようとか、自分が何を言ったか振り返ってみましようといったところを、ちょっと時間を必ず置くみたいなのが大事になってくるのかなと思っています。

成功体験です。成功体験は本当に大事ですが、やっぱり失敗体験といったところも私たちは大事なのかなと。特に失敗してもリカバリーが利くのだといった体験が大事なような気もしています。

思考の過程を書き出します。整理といったところになってくるとと思いますが、図表がうまく使えたりすることで、視点が好転されて、散逸しなくなったりすることがありますので、そういったところがうまく使えるようになってくると、人のサポートを受けなくても、もしかしたら自分で考えが整理できる方もいらっしゃると思っています。

簡単な説明ですけれども、以上で終わりにしたいと思います。

(朝日会長)

伊藤センター長さん、ありがとうございます。続きまして、川越を含めた、各ジョブセンターから挙げられた就労に必要な生活のスキルの紹介や、あるいはそれらを習得するための支援の具体例について、資料3の2および3の3を基に、事務局から説明をお願いしたいと思います。

(事務局)

それでは、資料の3の2をご覧くださいませでしょうか。これは4つのジョブセンターから取りまとめたものでございまして。社会生活を送る上で必要な生活スキルについてまとめておるものでございます。4つのカテゴリーに分かれておりますけれども、それぞれ挙がっております。

例えば日常生活ですと自己管理ですとか、安定した睡眠は生活リズム。その他、時間管理、金銭管理、コミュニケーション。コミュニケーションでは発信力、相談したり、連絡することが挙げられているということでございます。

また、4番目のところに、「自分の特性について説明、報告できる」ですとか、自分の体調が特に悪いときに状態を報告、相談できるということも必要ではないかということが挙げられております。

続きまして、A3版の資料、3の3をご覧くださいませでしょうか。こちらの表の見方でございます。左側が支援内容でございまして、こちらは社会生活を送る上で必要な生

活スキルの取得について、各ジョブセンターが支援した内容が盛り込まれております。

左から、支援前はどのような状態であったか、そしてどういうふうにして支援を行ったかということが続いております。また、右端にはそういった支援によって得た生活スキルを身に付けたメリットというのが載っておりますので、ご覧いただければと思います。私からは以上でございます。

(朝日会長)

ありがとうございました。先ほどの伊藤センター長さんのご報告とも絡む内容が、事例や、あるいは別の視点での取りまとめということで表わされているかと思います。事務局の報告にございましたけれども、日頃から支援に携わっているお立場から、ジョブセンター草加の福嶋センター長さんにおいでいただいておりますので、就労に必要な生活のスキルについて、一言コメントを頂戴できればと思います。よろしく願いいたします。

(埼玉県発達障害者就労支援センター（ジョブセンター草加）福嶋センター長)

すいません。紹介にあずかりました、ジョブセンター草加の福嶋と申します。よろしく願いいたします。

こちらに事例とかいろいろと載っているものと、この取りまとめのところにも書いてあるとおり、生活スキルといっても、本当に幅広くいろんなものが重要としてここに挙げられているのですけれども。恐らくこの全てができる人というのは、私たちの中にもなかなかいっしょにいないのじゃないかなというのは思います。

その中で、やはり著しくここができなくて困っているというところが、その方その方の課題といったことになりまして。一見あまり課題がないように見えても、よくよくお話を聞くと、「実は夜中衝動性に負けて、ずっとテレビとかを見ちゃって、4時ぐらいに寝て、朝起きられないのです」であったりですとか。

買い物ですね、どうしても欲しいものが我慢できなくて、クレジットで買い物をしてしまって、もう今月は全くお金がないので相談に行けませんと言われてしまって。交通費がありませんなんていうような方とかもいらっしゃいました。

われわれ支援側もその方の生活スキルの部分、今どこがしっかりできていて、じゃあ、どこが著しく困っている部分、生活する上でどこが一番困っていく部分なのかなというところの見極めも大変必要になってくるのかなというのは感じております。こんな形で大丈夫でしょうか。

(朝日会長)

ありがとうございます。皆さん、いただいた情報に対してコメントやご質問、ご意見等はあるかもしれませんが、それは後ほどとさせていただきます。

すみません、私から1つだけ事務局に確認で、資料3の2のアンダーラインの下線のところは聞き漏らしたかもしれないのですけれども。

(事務局)

失礼いたしました。こちらは事前に配布している資料から、さらに追加したものが、この下線の部分でございます。失礼いたしました。

(朝日会長)

はい。ご説明どおり、皆さまはお読み解きいただければと思います。

続きまして、発達障害者が日常生活や社会生活を送る上で必要な生活スキルについて、きょうのテーマになりますが、当事者の視点、支援者としての支援、家族としての支援から基調報告を村上委員さんをお願いをしたいと思います。よろしく願いいたします。

②村上委員からの報告

よろしく願いします。ただ今ご紹介いただきました、言語聴覚士の村上と申します。私は表向きの経歴はこんな感じです。大学は心理学科を出てから言語聴覚士の養成校へ行って、その後、現場で働いています。本もきょう、事前に皆さまにお送りした著書の他にも何冊か書いています。

きょう、こちらでお話しする立場としては、この当事者で、しかも専門家とか療育を受けて育った当事者という立場かつ、言語聴覚士として臨床現場で発達障害の方々への支援をしました。私の夫も実は当事者なので、家族の立場としても発達障害と関わっている、こんな立場の者がお話ししているということを、まず念頭に置いてお聞きいただけたらと思います。すみません、ここからは座ってお話しさせていただきます。

いろいろと、先ほどもご説明があったと思うのですが、なぜ生活スキルは今注目されているのか。ハードスキルは職歴とか学歴とか、仕事そのものに必要なスキルです。それを支えるものがソフトスキルとあって、例えば遅刻しないで出勤できるかとか、そういうハードスキルを活用するために必要なものです。やっぱり発達障害の方って、このソフトスキルが難しいケースが多い。

さらに言えば、ソフトスキルを支えるためのスキルが生活スキル、ライフスキルですね。例えば遅刻せずに出勤するためには早起きをしないとイケないとか、間に合うように身支度をするのが必要とか。そういう支えるためのものとしての視点で見ると、さらに生活スキルが必要になります。さらに言えば、働いていなくても当然生活はしなくてはイケないので、そういう面からも重要なと思います。

ただ、私が最近思うのは、例えば在宅勤務とか労働形態が変われば、早起きしなくてもいいよねという話もありますよね。なので、もう少し世の中の形が多様化することが必須なんじゃないかとも思います。

そういうことを、いろいろ支える形が多様化すると支援職も多様化しなくてはイケないので、そういう意味での支援職の対応化と、待遇改善をしないと人が集まらないので、そういう現実的なものも、考えも必要かなというのがありますよね。

生活の背景にあるものですから、やっぱりどんなものがあるかを考えてみましょう。まず1つ目は感覚的な場の存在、よく考えていただければお分かりかと思うのですが、ルールとか規則、世の中はルールがいっぱいあります。言葉が通じるためには場の存在は不可欠なですよ。例えば私が日本語話者なので、日本にいる場合はそんなに不自由しませんが、海外に行って日本語が第1言語ではない者が暮らすというのはかなり大変なことです。そういう場が必要になります。

私は最近よく支援でも言うのですが、この3次元空間にいるということの制約がすごく大きいんですよ。発達障害の方って、やっぱり3次元で暮らすのはすごく苦手なんです。割と時間とか、段取りとか、コミュニケーション、お金の制約というのは、より恣意（しい）的なものですよ。人間社会で必要だから生まれたものなのですが、そういうものをうまく運用していくというのは、すごく当事者にとっては大変だなと私は感じています。

ただし、社会に関わる際には必要な条件ですよ。ここら辺が難しい人たちののだなというのは、まずちょっと押さえてもらえるといいかなと思っています。

それでは、なぜ大変なのかというと、生活は本当にマルチタスクだからなのだと思います。私が例えば出勤するときどんなことをやっていたかといえば、いろんなことをどれからやるのとか、どんな服を着るのとか、何をすると、すごく考えます。発達障害の人は一個一個の動作をそれぞれ単独で行う能力はあるのです。ところが、これを一定の時間内で、スタートする場合、どれからやるの、どういうふう流れていくの、段取りを組むの、ということから生活の中でやっていくというのがとても難しい。

なぜかという、タスクの優先順位は自然には決められないからです。すごく論理的

に考えていかないと、ああ、だからこれが一番最初なのねみたいな判断は、大半の人は自然にできるのです。感覚的にというのが難しい。

タスクの一つ一つにつまずくポイントがあります。さっきも決められないと言いましたが、じゃあ、どの服にするのか決められないとか。朝ごはん何にするのか決められないとか。このごみはどの種類のごみなのか決められないとか。そういうことがいろいろある。

また、生活スキルの違いもすごくありまして。ライフステージによって生活スキルはいろいろ変わってくる。特に成人期以降というのは、マルチタスクと調整能力がものすごく問われてきます。先ほどもお話ししましたが、家事というのは究極のマルチタスクです。会社での人間関係とか、これもやっぱり一番つまずく理由ですが、これと同時に業務のプランニングをしたり、スキルアップもしたりしていかなくちゃいけない。仕事でもそれでハードスキルに当たるところさえやっていたらいいという感じではないと思います。ソフトスキルも伸ばしていけないといけません。日本の企業で働き続けるのはけっこう大変だと思います。

結婚や恋愛というコミュニケーションの問題もどんどん複雑になっていきます。あと、割と女性がつまずくのは家庭の問題ですね。育児や介護がすごく負担が大きくなっていく。女性当事者って、割と就労はある程度こなせても、結婚をしてお子さんが生まれて、やる事が自分のことだけじゃなくなって、負担がどんどん増えていったりすることで、「あれ、もしかして私…」というケースもやっぱり多いかなというのは感じています。

特性や属性による違い、時代や状況で求められるものが変わっていきます。当事者で、やっぱりこれは難しいよねというのは、運転免許なのです。今、地方は特に、そもそも車の運転ができないと仕事に行けないと思います。しかし、自動車の運転はマルチタスクです。いろいろなことに注意をしなければ運転はできない。そういうことが、仕事をする前に求められてしまう。そういうのが現実にあります。

こういうことを踏まえて私はどうだったかという、こんな感じでした。就学前のケースで、私も相談業務で担当していますが、やっぱり多いのは感覚過敏によるものが理由として結構多いのですよね。感覚過敏が理由で、いろいろと怒られたとか、また怒られることを必要以上にびっくりしてしまったり。この辺は見えないので、さらに理解はされにくい問題となります。ようやく最近注目はされてきていますが、やはりなぜ必要以上に偏ってしまうかとか、思考が一边倒になっちゃうかという、感覚の偏りのことも大きい。

就学後、やっぱり学校はすごく私にとっては混乱するような場所でした。特に私、結

構班行動が苦手だったのですよね。いまだによく分かっていないのですけれども。学校は結構抽象的な目標が多いのですよね。

みんな仲良くしましょうというのは、本当にあれは嫌でしたね。なんで、たまたま同じ地域に、同じ一定の期間だけ誕生日の時期が同じただただで、なんで仲良くしなくちゃいけないのかか思っていました。だから、むしろこれから必要なのは多少気の合わない人とでも、何か課題を解決するという経験じゃないのかか、すごく今になると思っ
ています。

あとは、思春期以降は、ハードスキルに必要なスキルを身に付けつつも、体調管理などライフスキルをどう並行させて学ぶかということかなと思っています。

一方で、立場によって大変さが変わるという点では、私は家族になって見てよく分かったことです。当事者、こっちは当事者としての大変さですよね。昨日、おととい台風が来て、私はもう感覚過敏がひどかった。とにかく疲れていました。昨日も、やっと台風行ったなと思ったら、台風で緊張したことがようやく解けて、ものすごい疲労感に襲われて。やはり台風で疲れていたのだなとか。気圧とか気温とか、そういうことでも当事者はかなり体調に出るので。それで、でもきょう台風で調子悪いので休みますなんていうのも、なかなか認められる話では今の世の中はないので。やっぱりもう少しその辺り、柔軟に働けるように社会が変わるとまたいいのかなとかかと思ったりします。

情報処理の苦手さというのはどうしてもありますね。今の生活の様式だと。うちは幸い夫も私も割と自宅で自分のペースで働けるような環境になっているので、そこは自由に過ごせるというのは、今2人とも就労できている要因かなと思います。幸運な場合なのでしょうけれども、そういう自分で働きやすい環境をつくれたというのも大きいですね。

周囲の大変さというのは、そんなこと言っても、やはり周囲の人は周囲の人で、社会では大人になったら働かなくちゃいけないとか、そういう考えに囚われているのじゃないかなと私は思っているのですね。週に5日昼間働くと、それも正社員で働かなくちゃいけないという思い込みに囚われ過ぎちゃっていると、それはそれでうまくいかないのじゃないかなと思います。

そうは言っても、時間とかお金の管理とか、そういうサポートってすごく、やはり苦手な人をサポートするのは大変なことではあるので、その辺りの調整役として期待され過ぎちゃうと、その調整することの大変さで、みんなアップアップになっちゃうケースも多いので、その辺を支援者側もどう支えていくかは大事かなと思います。

当事者のトラブルにはどんなことがあるか、やはり当事者も支援者も障害に気付いて

いないというのはまずあるのでしょうけれども。ただ、困難さというものに対して、やっぱりうまく合わせ切れない。また、合わせたとしても負担がすごく大きくなっちゃうと、それはそれでうまくいかない。

日本は割と年齢で、このぐらいの年齢だとこういうことができますよねという期待が社会の中でも大きいのですよね。何十歳ぐらいになったら結婚して、何歳ぐらいになったら、もう親の面倒も見なくちゃとか、そういうのがありますよね。そういう立場や能力の期待と現状のギャップはすごく大きいと思います。

成長による問題の変化にやっぱり対応が遅れちゃう。思春期、あと青年期ぐらいがやっぱり変化のタイミングかなと私は感じています。あと、自立のための生活スキルが不足しているケースは多いので、そこをどうフォローしていくかということはあると思います。適切な対応の問題。やはりお互い現状認識がうまくいっていなかったとか、解決策が未導入、その結果他者とうまくつながっていないという場合は多いです。だから、これは社会の制度とかもまだまだ不十分な面は多いかなと思っています。

基本的な対人関係というのが、さっきの場が必要と何度もお話していたと思うのですが、やっぱりうまくやりとりが安定できているか、経験をどのぐらい積んでいるかがポイントになります。チームみたいな、人が集まっているいろいろなことをやれるのだということの経験が当事者はなかなか難しいのですよね。

ただ、最近、もちろんネットは悪い面も強調されていますが、インターネットの発達には私にはすごく、発達障害の人にとっては良かった面も多いです。実際、私と夫もインターネットを通じて知り合ったりもしましたし。SNSとかで緩くつながれると、割とうまくいくケースが多かったりします。

アメリカで研究されている方からも、セカンドライフというバーチャル空間で当事者同士がつながって、悩みを相談し合ったりするケースが報告されていて、必ずしも現実空間だけじゃないのです。今、そういう選択肢が増えてきたということも世の中を生きていく上で、当事者にとっては、いい面かなとは思いますが。ただ、それをコントロールする力がないと、やっぱりずっとネットだけに依存してしまうとか、ゲームとかで課金してお金が足りないとか、そういうことが起きるでしょう。

個人単位とチームの動き方の違いもあります。自立はここでもずっとお話が出ていますが、1人暮らしをする場合と、2人以上で暮らしたりとか、個人事業で働く場合と、会社とか企業の中で働く場合は、ちょっと動き方が違うのですよね。そういうことを支援者側もちゃんと分かっていないと、1人では動けるねという感じで見られてしまうと、そうはいかないよというのが、ここの話になります。

家族と暮らすというのは、うちの夫も20年一緒に暮らしていますが、いまだにぴんときていない人です。その辺りは家族の立場で見ていると、正直言って結構大変なのです。

サポートする側としての不満。これは多分会社の中で現場に入ってみた人は、絶対この辺りが不満になるなというところをまとめてみたのですけれども。やっぱり約束したことも忘れちゃう。あと、困っているということに、なかなか相手の状況は気付けないですよ。こっちが困っているとはっきり言わないと分かってもらえないので。それでいて、彼にとっては困っていないので、こっちが困っているのだということを理解するまでに時間がかかって、伝わるまでにこっちがへとへとになっていることが多いです。

言葉の定義や意味の捉え方がかなり違ってきますので、そのずれをちゃんとこちらも分かっていないと、分かっているのかなと思って話をしていると、とんでもないことになると。こちらの体調がだんだん悪化しているとか、そういうことも分からない。自分のペースで割と生活されてしまう。分からないことを質問してと言うのですが、分からないことが分からなかったりするんですよ。どういう状況を分からないというのかという定義が曖昧。お互いさまというのが意外とよく分かっていないのです。「お互い助け合うのだ」と口では言いますが、じゃあ、それを具体的にどういう状況を何ていうのと言うと、一個一個洗い出していくと、「これはどうなのよ」とこっちが確認をすると、「ああ、そうか、違うね」とかなりますが。

話を聞くというのも、支援者側が話をうまく掘り下げたり、具体的な行動に落とし込んだりするスキルはすごく重要です。今、保育士とか保健師と組んで働いていますが、この辺りを、こっちが深く突っ込んでいかないと、やっぱり支援職でもそういうことが出てこないことが多いですね。だから、この辺りは、はっきり言って支援職の方々には、もう少し勉強してほしいと思うことは多いです。

わが家の場合は、じゃあどういうふうに行っているかということ、さっきの可視化とか、図じゃないですが、「この状況を、私からの説明を受ける前に分かっていたか、分かっていたいなかったか」というのを私は知りたかったのですが、「(説明をされる前の時点で)分かっていたか」と聞くと、そのときには説明を聞いたので今は知っているから「知っている」と言っちゃうのですよね。「知っていてそういうことを言ったの?」と言って、こっちが図を描いて「説明を受ける前の時点では知らなかったのでしょうか?」と確認すると、「ああ、知らなかった」と、爽やかに言うのですけれども。

これは、図があつて、私はここを聞いたかったのだと言えば分かりますが、図もなく、ただの言葉、音声言語だけでやったら絶対にぐちゃぐちゃになるのですよね。「知って

いる?」、「知らない」、「知らない?」、「知っている」みたいになって。

うちの夫は特に文脈とか時制を理解するのが苦手なので、やっぱりそういう意味では本当に言葉をどこまで理解しているのかというのを、こっちも把握していないと難しい。ちょっと飛びますが資料の 17 ページ、ここですね。言語理解の発達と私はよく言うのですが、当事者はこの後ろの「コンテキスト（文脈）の理解」「抽象的な内容の理解」「談話の理解」。この 3 つが意外と難しい方が多いです。これが、どこをどう分かっているのか。

あと、もう一個大事なのは、特に IQ の高い ASD の方は、抽象ではよく分かるのですが、これは具体的に何をするといいのと分からない方は意外と多いです。抽象と具象をつなぐ力というのにも必要なと思っています。

相談をする力というの、さっきのジョブセンターの伊藤さんもお話しされていましたが、こういうことを一個一個洗い出していく。必ず具体的に行動計画を立てていかないと、何をもってできたことになるのというのが分からないのですよね。それをお互い可視化していくというのにも必要なのです。

ただ、当事者の方には、こういうことをやられて、すごくできないことの現実を突き付けられて、そこでまたバーンアウトするケースも多いのですよね。だから、そういう意味では段階、今この人はどんな段階なのかというのを見ていく必要があります。ただ、これをやればいいというものではないのも大事なかなと思います。

自立へのポイントと、ここにもいろいろ書いているのですけれども。ただ、全部はできないよねというのはいつも思います。うまく人に助けを求められるかというのは本当に大事なかなと。

もう一個大事なのは自己肯定感です。落ち込んでばかりだと、精神的にも持ちません。発達障害の当事者は本当にうつ病持ちが多いのです。現実を突き付けられちゃうと、このできなさ加減に、もう嫌になっちゃう。うちの夫婦が割とうまくいっている理由は、2 人とも根が結構楽天主家なのですよね。だから何とかなっている面があつて。そういうレジリアンスみたいなものは、これから必要なんじゃないかなと感じています。

やっぱり支援者に分かってほしいということは、手間と努力が要る、あと、「人に頼めばいいのに」と言わないでとよく言うのですね。お膳立てがものすごく大変なので。「まず、日頃お膳立てできるような、じゃあ、その仕組みを作ってくださいよ」とよく訴えています。家庭というのは、ある意味でフリーな場面なので、フリーな場面にできたらアウトリーチできるような、家の中での実際的なアドバイスとか、こういうことをやるといいよという、そういう制度があるともっといいんじゃないかなと思います。具

体的な行動に落とし込む手法を勉強してほしいというのは、いつも、本当にそれはつくづく思っています。

最後に、他の人に教わる経験をしてほしいかなと思います。大人になると、だんだん苦手なことは逃げられるのですが、当事者は本当に苦手なことを突き付けられて生きなくてははいけませんし、マイノリティーはできないということを説明しなくちゃいけないのですよね。説明することに疲れ果てるのですよ。だって、大半の人は説明しなくてもOKですよ。だけど、いろんなことを説明して、しかもそれを説明したからといって、その願いがかなうわけではないという無力感とも戦っているわけです。そこはもう少し支援者職の方にも分かってもらえるとうれしいかなと思います。以上です。ありがとうございます。

(3) 発達障害者が日常生活や社会生活を送る上で必要なライフステージ毎の支援について（意見交換）

(朝日会長)

基調報告、ありがとうございます。就労支援のお立場からは、多分当事者の方と、それから同僚や事業所との間に入って課題を調整していくという点でのご体験を踏まえてご報告いただきました。

それから、村上委員さんからはご自身の多面的な立場から、しかもそれを分かりやすく、専門家としての説明を加えていただいて、まさに全体と捉えながらお話をいただけたのではないかなと感謝しております。皆さまもいかがだったでしょうか。

残りの時間が、これらの基調報告や加えてのコメント、資料を踏まえて、これから意見交換をしていきたいと思っております。

発達障害者が日常生活や社会生活を送る上で必要なライフステージごとの支援というところで。特にこの意見交換のための資料はございませんので、これまでのご説明や、きょうご提供いただいた資料を基に、それぞれの委員の皆さま方からご意見やアドバイス、コメントを頂戴できればと思っています。

特に先ほど来ご提起いただいた生活スキルを幼児期から始まる各ライフステージで、どのような支援に結び付けていくのか。支援機関はどのような支援を行ったらよいのかという点でご意見をいただきたいと思っております。

ランダムでも結構なんですけど、一応ライフステージごとに焦点を絞りながら行きたいと思っておりますので、ざっくりと幼児期における支援、学齢期における支援、そして成人期における支援ということで、大まかに3つぐらいのライフステージに分けさせて

いただいて、テーマは特に成人期での日常生活や就労など、社会生活に向けた必要な生活スキルを獲得したり、それを支援していくためにどんなものが課題であったり、求められるかということを中心にお話をいただければと思います。

ご自身の委員さんのお立場が、ここが幼児期だというふうに決めていただく必要はありませんが、幼児期におけるライフステージという点で、ご意見等ございますでしょうか。では、鈴木委員さん、お願いします。

(鈴木委員)

すいません。大変たくさん、いろいろと勉強させていただきました。ありがとうございました。

ただ、ちょっと幼児期、学齢期、成人期とか、こういうふうに分けてらっしゃるのですが、私はその前に、やっぱりちょっとこの委員会で押さえとかなきゃいけないことがあるんじゃないかと思って、今、発言させていただきたいのですけれども。

(朝日会長)

どうぞ。ありがとうございます。

(鈴木委員)

先ほどから、まず、例えばジョブセンターの方のお話を聞いていたときに思ったのは、じゃあそのジョブセンターに来た人たちが対峙(たいじ)する会社の人とか、その人たちの価値観がどこにあるのかというふうに、ちょっと思ったのですね。その人たちについて、当事者の困り感というのはすごく出てきていて、対策というのは出てきたけれども、でもその人たちが入っていく集団の人たちが、その人をどう受け入れているのかといったことって、すごく案外そっちも50%キーワードじゃないのと、ちょっと思って聞いていたのが1点目。

次に、村上委員からの発言を聞いていたときに、ああ、村上委員も、ご主人もとてもいい、すごく楽天的だとおっしゃったけれども、こういうふうに自分の特性を逆に持ちながらも社会貢献的な仕事ができているという、このレジリアンスとおっしゃったのですが、その力はすごく大事だなと、ずっと私はいつも思っているのですが、思うのですね。

そのときに、このジョブセンターの事例の中で、じゃあ、こういう人はやっぱりうつじゃんとか、二次障害を結構積んでいる人は多いけれども、実際にこの人たちは、私は

キーワードで関連の第1例目も、お母さんのサポートがあったんだこの人といって、丸をしちゃったり。2番の人も、NPO法人に相談をしに来られたのだとか、最後のほうの10年間引きこもりの人も、相談に来て、成功体験を積んだ流れの中で成功があったのだと思ったときに、ああ、年齢が上に行ったとしても支援者がちゃんとして、そこら辺をちゃんとやって、その人が成功体験を積むことによって、また生きる力を持つていくのですね。

それで、前置きが長くて申し訳ないのですけれども。私が言いたいのは、ペアレントトレーニングとかもそうなのですが、スキルに走ると、実際にろくなことがないのだと私はちょっと思っています。

支援者の人とか社会の人たちにスキルだけ教えちゃうと、絶対に逆の波がまた来るのですよ。じゃあ、何が大事かといったときに、やっぱり先ほど村上委員がすごく言っていた、多様な価値観。だから、社会の枠組みが変わってくれば、別に何歳になったら結婚しなきゃいけないのよとか、そういう固定観念じゃないとか、別に在宅ホームワークでもいいのよみたいなという、それとかジョブセンターの方も失敗してもいいんだよ、やり直せばみたいな、そうやって、やっぱりその人たちが、私は発達特性の人たちは特性があるが故と、もう一個、社会の受け入れ側の価値観の堅さによって、その人たちが受け入れられないことによる否定感がある。それが二次障害につながっていると思うので。

その二次障害を積んだ年齢が高い人たちは、なかなか立ち上がってこられなくて。実際に医療機関に来ている人たちも、どういうふうにこの人たちを立ち上がらせようかと思うのですよ。

何を言いたいかという、やっぱり今回の委員会として、ここら辺をターゲットにするのはいいのだけれども、2つテーマがあって。1つはやっぱりちっちゃいうちから自己肯定感というのを培っていくのだという、この委員会でベースに基本姿勢がそこにあるといったところは置いておいたほうがいいんじゃないかということと。

2点目は、やっぱりそれを受け入れる人たちの価値観を変えていく努力も並行してやっていくのだという上に、このスキルを乗せるというのがいいんじゃないかというふうに思いましたということをお願いいたします。すいません、長くなって。

(朝日会長)

ありがとうございました。スキルを検討していく前提としての基本線というところで、大変重要なお指摘をいただきましたと思います。便宜的に幼児期からと申し上げましたけれ

ども、最終的にはそこで求められるありようというものを、では、具体的に幼児期、学齢期、成人期ではどういう課題として向き合っていくかというように、後ほど整理をしていけばよいと思います。

せっかくですので、その本論のところ、時間は限られておりますが、きょうのご報告を聞かれた上での感想やコメントでも結構ですのでご発言をお願いします。事務局には感想やコメントの中から、この柱立てで用意されているところにうまく落とし込んでいくということをお願いをしていきたいと思っておりますので、いかがでしょうか。どんな観点からでも結構ですので、お願いします。

(竹田委員)

埼玉県自閉症協会の竹田と申します。ありがとうございます。私も今、鈴木委員の発言を聞いて、まさにそのとおりだなと思って、同じようなことをお話するかもしれないのですけれども。

今回、この会議の議題をご連絡いただきまして、私どもは親の会ですので、親の会として幾つかのやっぱり違和感を感じています。当初送られてきた議題内容が発達障害者支援、就労に必要な生活スキルについてということでしたので、今なぜ成人期に特化した内容で、しかも就労というふうに限定しているのかということと、以前整備検討委員会のときもやはり成人期に特化して会議を進めますといったことがあったので、もしかして今回も同じようになっちゃうのではないかと、そもそもこの支援地域協議会というのは、どこかのライフステージに区切ってやるものではないんじゃないかと思ったので、担当者さまといろいろやりとりをさせていただきました。

最終的に送っていただいた議題内容は、発達障害者が日常生活や社会に関わる際に必要な生活スキルについてというふうに変更していただきましたので、きっといろいろとご検討を重ねられて、このような議題に変更されたのだと推察しています。

でも、拝見すると議題の目的というのは、とはいえ大きく変わることはなくて。私たちが感じたことなのですが、発達障害のある人は社会で自立する上でさまざまな問題を抱えていて、それはスキルが身に付いていないからだ。身に付いていないスキルを習得させるためにどうしたらいいかということなんじゃないかというふうに私たちは捉えました。そのお考えに対しては、非常に親の会として落胆しております。これは本人が変わることということを前提とした考えだと思っていて。それこそ昔ながらのICIDH、その考え方そのものなんじゃないかというふうに私たちは考えました。

私たち自身も彼らが全く努力しないでもいいとは思っていません。定型発達の人たちと

同じように社会で生きていくために必要なルールというものはたくさんありますから、それはその子、その人にとって理解の度合いとか、学び方とか、違いはあるでしょうけれども、身に付けていかなければならないことだというふうに思っています。

でも、それは結果的に理解するとか、身に付けるということであって、先ほど鈴木委員もおっしゃっていましたが、スキルに走るとろくなことがないよとおっしゃっていたときは、本当にそのとおりの思ったのですけれども。こういうふうに行政の側から掲げられるようなことではないんじゃないかなというふうに、私たち親の会としては思います。

習得させたいとか、学ばせたいというふうに、こちらが押し付けて教えるものじゃなくて、彼らの興味、関心を踏まえて、それから幼児期から順に時期を追って教えていくものであって。彼らはやはり学び方が違うから定型発達の子どもたちと同じ場にいるだけでは学べない。だから、その子その子に合った方法で、その子に分かるように。それを積み重ねていく中でスキルとして習得していけるんじゃないかなというふうに思っています。

こういうふうに必要なルールというものを積み重ねていくのは、やっぱり家庭が基本であって。その家庭を支える。保護者が障害について正しく理解していくことを支える。つまり、保護者への支援と、それから周囲の支援体制を整えること。それを私たちはそれらが何より大事なんじゃないかなというふうに思うのですけれども。

今回、このような議題というふうに入っていたので、私たちの考えは間違っているのかなと、ちょっと思った向きもあります。今の ICF の考えは本当に彼らは障害があることが悪いわけじゃなくて、環境を整えることで障害が障害ではなくなる。環境の中には、もちろん物理的な環境もありますが、人なども入りますので、この協議会ではぜひ周囲の理解とか支援体制、それから保護者への支援とか、そういったことを考えていただくべきではないかなと感じました。雑ぱくですけれども、すいません。

(朝日会長)

ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。もし必要であれば、事務局からお話をいただいてもいいかなと思います。

(鈴木委員)

はい。

(朝日会長)

鈴木委員さん、お願いします。

(鈴木委員)

すいません。私、石を投げておいて、またすくうような話なんですけれども。私は別にこの議題が悪いと言っているんじゃないよね。だから、対峙するものじゃないと思うのね。具体的にこういったことにするというのはいいけれども、ベースのところ、そこはみんなで確認し合おうねといったことなのですよ。

こういう委員会とかも、具体的に何かある程度決まっていけない部分もあるかなとか思ったりすると、そういったことかなとちょっと思ったのです。どうでしょうか。

(朝日会長)

私も事前にこのお題をいただいて、私の考えとしては、発達障害のある方が社会生活や日常生活を送られていく上で必要なスキルを身に付けさせるということではなく、それらのスキルや生活を成り立たせることは、関わる人たちと非常に双方向性の関係があることを実感していました。例えば、職場であれば同僚がどういうふうに向き合っているのか。社会生活であれば近隣の人たちがどう向き合っているのか。スキルはそういうような双方向性の中で決定づけられるのではないかと思うのですね。

そういう中で、課題としてはこういうことができるによりしづらさが軽減するよねというのがあって、そのためにはどうかといったときには、当然環境の要因が変わっていくということがやはり大事だと私も受け取りました。その意味では、この際スキルを小さい時から、ぐいぐいと身に付けさせて、生きやすくして、暮らしやすくしていく方向ではないことは、多分皆さんにも共有されると思います。

もう1つ自分の分野に引き付けて申し訳ないのですが、昨日もある検討会で話をしていたのですが、就労上の課題、職場不適應の課題ですが、従来は、事業主や職場は働く障害者に理由があると思いがちでした。でも、逆に言うと、働く人にとっては、いや、職場に問題があるとなっていた。それらを、先ほど来、お話の中に出ているように、冷静に客観的に事実として整理をしていくということがすごく大事だということ。

そのあたりから始めないと、これからの職場不適應の問題、かつては能力が足りない、マナーが身に付いていない、働き手が悪いのだとなりがちだったのが、そうではなくて環境をどのように考えたらうまくいったのかなと双方で考えていくことがすごく大事

であるということです。

このスキルという、たまたまスキルという言葉が出ていますが、そこを巡るところでは、やはり双方向性というのが重要だと私も感じています。

その上でどうでしょうか。そこの方向のところも確認できれば、あとは具体的に、最終的に発達障害のある方が暮らしやすかったり、働きやすい環境づくり、社会づくりにつながっていけばよろしいかと思うところです。

(丸木副会長)

いいですか。

(朝日会長)

はい。では副会長、よろしくお願いします。

(丸木副会長)

神経内科医の立場で診ておりました。大人が多いのですが、もちろん子どものケースもありますけれども。ちょっと御幣があったら困るのですが、この発達障害も認知症の患者さんと同じように考えると、すごく分かりやすいなど。

認知症は、今までは治らない病気で本当にとか、何もできないから医者に行っても駄目だった、もうやめさせちゃえとかになるのですけれども。そういうことではなくて、今、国を挙げて認知症施策を行って、サポーター養成講座だとか、そういうのをやっています。サポーター養成講座というのは何をやるかという、認知症の患者さんを周りがどうやって見るかというのを具体的に教えているのですね。これは大人ばかりじゃなくて、小学生にもいろいろな講座をやっているとか。そうすると、今認知症は、認知症だから病院に入れてもう入院しなきゃいけないとか在宅で孤立するわけじゃなくて、周りが面倒を見てあげる。面倒を見るというのも失礼かもしれませんが。認知症の患者さんはなかなかスキルを上げられないこともありますから。

今はいいお薬も出てきました。発達障害でも効くお薬も随分出てきた。実際に僕の物忘れ外来などは、おまえはミスが多いからぼけているのだろう、物忘れ外来を予約してこいと上司に言われて、来るのですが、認知症ではなく発達障害の方が多い。そういう方に関しては、やはり産業医とか、そういうもの、今は若年性の認知症の患者さんが来た場合には、認知症のコーディネーターというのは埼玉県におりまして、すぐにその人に相談して、その人が若年性のその患者さんと一緒に、その産業医のところ、もしくは

人事の方とお話をして、この人を今後どうやっていったらいいだろうか。もちろん発達障害よりもずっと重いような状況になっていきますが、そういうシステムを作るとすごくいいなと。

僕は勉強不足で申し訳なかったのですが、ジョブセンターがあるのは僕は知らなくてですね。逆に僕らは神経を専門でやっている者でも知らないぐらいですから、恐らくあんまり産業医の先生とか、一般のそういう先生方も知らないんじゃないかな。ですから、そういうものを知ったときに、この人は発達障害でこういうことが起こっているのだということを産業医の先生のほうからジョブセンターに行ってみたらどうか、そういうシステムができるとか。逆にこういう委員会で埼玉県内の産業医委員会に連絡を取って、発達障害の方の対応法というのをしっかり、また皆さんでやるだとか。オレンジリングというのは認知症の場合は持つと、今は何千万人が持っているという形になりますけれども。発達障害に関してもグリーンリングとかいって、そういう発達障害のサポーターになるとか、そういうことをきちんと、周りの対応法でこの人たちは生きやすくなるのだということを知っていただくのはとてもいいことかなと思うのですね。

ですから、先ほど双方向のと言ったのですが、もちろんスキルも大切ですが、周りからのサポートというのは、もう具体的に認知症ですごく成果を挙げています。ですから、それと同じような形で、もし踏襲すると面白いかなと思ったりしております。

(朝日会長)

ありがとうございます。さらにいかがでしょうか。酒井委員さん。

(酒井委員)

埼玉県障害者就業・生活支援センター連絡協議会からです。就業・生活支援センターは障害のある方の就労支援をしている機関で、私も相談の業務を行っております。両委員の発表、ありがとうございます。本当に勉強になりました。

私も就労支援というところで、発達障害のある方と関わっております。先ほど鈴木委員よりもお話があったように、やはり自己肯定感というのが一つのキーワードになるのではないかなと思いつつ話を聞いていました。

二次障害的にうつですとか、二次障害的に障害を持たれていそうな精神の手帳を持たれて支援機関ですとかが関わっていく中で発達障害が分かっていくような方が多いところすとか。やはりご本人の価値観ですと、そこに寄り添いながら相談をしていくので、支援者側としてもなかなかご本人の生育的なご経験から認知が定まってくるかと思

うのですが、そこに少し偏りがあったりして。そこのご説明をしたりとか、支援をしていく中での難しさを感じています。

やはりそこのお話を聞く中で、学齢期のいじめの体験ですとか、親御さんへの受容されてこなかった間の悩みですとかといったものが、よく相談の中には出てきますので、そういうところがより手厚いサポートなどがあって、ご家族のサポートもそうですし、教育機関でのサポートなどがあって、そういうものを受け止めていくと、相談者との関係がうまく築けていくのではないかなと思います。ちょっとまとまりがないのですけれども。

支援機関と一緒に進めるのは難しい方というのがいらっしやいまして。担当している圏域は戸田、蕨、川口を担当しているのですが。ジョブセンターの方たちと連携したりしているのですが。そういった機関に行って、長く続けられた中での不信感ですとか、被害的な思考になったりですとか。そういったところでも受け止め切れない、私たちの相談の中でもなかなか受け止め切れない。

でも、その障害分野の精神障害の方が利用される福祉サービスですかね、地域活動支援センター、デイケアなどを利用されても、やはりなじめずに、どこにも行き場所がない、所属感がないというような方。そういった方は生育的なところで、なかなか受け止めてもらえる場所がなかったというのは大きいのではないかなというふうに感じています。そういった方が相談できたりとか、不安にならずに生活できるような環境を整えていくことが、すごくそのライフスキルにもいいのかなと。ライフスキルの習得のためにも対人関係を築くためのベースのところはすごく大事じゃないか。そこがやはり自己肯定感が持てるような環境で社会生活を送っていただけるような体制が取れるといいかなと思います。

また、私たちは障害のほうの相談機関の相談支援事業所、生活支援センターですとか、そういったところと連携をするのですが、発達障害の方の理解がまだまだなところもあるのが正直なところで。就労支援機関でもそうですし、相談が多かったりして、電話の回数がたくさん来て、ちょっと困った感を持っているような状況もありますし、別のセンターに相談に行ったりして、じゃあ、どこが今、たくさん相談に乗っていると、実際そういうことも起きていますので、支援者機関、支援者側ももっと理解を深めていくところが必要ではないかなと感じています。

(朝日会長)

ありがとうございます。まだご発言をいただいていない委員さんからも、ぜひお伺い

したいのですが、いかがでしょうか。どんな観点からでも結構でございます。では、枝久保委員さん、お願いいたします。

(枝久保委員)

先ほど、鈴木委員のほうからお話があった自己肯定感、幼児期というもの、学齢期辺りになってくると、これはできない、あれはできないというところにさらされるわけですよ。

そこで今、合理的配慮と言われるようになったけれども、これからはまだまだな状況だと思うのですけれども。その中で、これでいいのか、これしかできないかもしれないけれども、「これしか」ということでは評価は良くないですが、これでこれができる、これはできない、苦手だ、でもこれでいいのだという、そういう自己肯定感を持った大人になっていくというのがとても大事なことで。スキルそのものよりも、土台をまずつくっていくことだろうと思います。

スキルに関係するかどうか分かりませんが、私は高次脳機能障害の支援をずっと長いことやっていたのですが、私はこれができる、でもこれならできます。例えばマルチタスクは難しいかもしれませんが、順番に出てくればできますとか、マイカルテというのを作らせたのですよね。みんなの前で発表して。それは、一人一人みんなでできること、できないことは違うわけです。マイカルテを作って、もし働く際に、あるいは生活をする場で私はこういうことが苦手だけれども、これならできますということを表現できるようにしましょうという指導をずっとしていたのですが、私なんかでも、多分イコールじゃないかなと思います。

(朝日会長)

ありがとうございます。さらにいかがでしょうか。ぜひ2つのご報告で気付かされたこともたくさん多いので、その報告を聞かれた率直な感想でも結構でございます。いかがでしょうか。お願いいたします。

(久保委員)

ご報告ありがとうございます。志木市のほうで児童発達相談センターという名称で乳幼児期から18歳未満までの方の発達が気になるところから、また発達障がいのお子さんまで相談に乗っております。

きょう、お話を伺いまして、やはり私たちは本当に力不足かもしれないのですけれど

も、親御さんは主に乳幼児期の方が多く、うちの子の発達が遅れているのかどうなのかというようにところを相談にみえます。健常の方で、追い付かれる方もいらっしゃいますし、やはりちょっと養育機関をご紹介して、そちらをご案内したり、あるいは医療機関を紹介して診療を受けるような方もいらっしゃる現状がございます。

自分らスタッフが発達障がいの方への考え方、捉え方が足りないところとか、いつも気付かされております。きょう、基調講演を伺いまして、自己肯定感という言葉 皆さんはお使いになっていらっしゃいますが、うちの相談にみえたときに心掛けているところは、ここに子どもが楽しく、児童室という、遊ぶ狭いスペースがございまして、そこで楽しく遊んで、最後ににっこり笑って帰れるように、ちょっと場面転換が難しくて泣いちゃう子もいますけれども、また来てねという感じで受け止めていくことです。

親御さんもいろいろな考えの方がいらっしゃいますし、先ほどお話があった施設、センターに対する不信感というか、子どもへの、子どもの発達の状況に対する、親がどうやって受け止めたらいいのだろうといった不安の中にいらっしゃる方もいるので、そういう方にどう寄り添っていったらいいのかなというのは考えています。

相談にみえる方以外でも、周囲の理解というところにつながりますが、周りのお母さんたちの、ママ友の方々が、お子さんちょっと心配だよ、言葉がゆっくりで、だからちょっとこういううちのセンターみたいところが、すきっぷがあるよと紹介してくれるような雰囲気になるためには、どう勧めていったらいいのかなというのが、今考えているところです。以上です。

(朝日会長)

ありがとうございます。終了予定時刻が迫ってまいりましたので、もし今ご発言ということであれば、伺いたいと思いますが。よろしいでしょうか。

2つの基調報告で示されたキーワードというか、重要事項があまりにもたくさんありますので、今までのご議論を簡単に整理して、次につなげたいと思います。スキルというところで、細かいところに目を当てるのではなくて、例えば2つの基調報告や、今のディスカッションに共通する、自己肯定感であったり、失敗をしても大丈夫だと思える対応力であったり、困ったときにヘルプを求められる、サポートを求められる力であったり、そういうものが幾つか指摘されました。

そこに対して、では幼児期にはどのような対応をしていく必要があるのか、学齢期では、さっきは班行動の話もありましたけれども、例えばそういうものを分かりやすく伝えていくにはどうしたらいいのかとか。そして、成人期では、特に職場ではどうで、

社会生活ではどうでというところで、ちょっとマトリックスにするような形で、きょうの出していただいたものを整理して、そこに当てはめる中で、今回の支援センターさんの作業を進めていくといいのかなと思いました。

その前提として、基本的な課題を出していただきましたので、そこにそもそも日常生活や社会生活を送る上で必要なスキルとはこういうことを言うということ、きちっとこの協議会での議論を踏まえて書いていくということで、作業を進めさせていただくということで、いかがでしょうか。それを、また皆さんにお諮りをして、ぜひこの協議会からのメッセージということでまとめさせていただきます。そのマトリックスなどを作成するときには、私もできるだけ協力をさせていただきたいと思いますので、皆さん方には、そこに委ねていただければと思いますが、よろしいでしょうか。

(鈴木委員)

ちょっと私は思うのですが、今、幼保小とかの研修会をやっている。実感としては幼稚園、保育園とか、特別支援教育の先生もきょうはみえていますが、小学校とか高校も、先生たちとか、中学校もここで支援教育を始めていると思うんですね。そういった意味では、少しずつなのだけれども、やっぱりちょっとウイークだなと思うのは、そういった意味で言うと、就労支援の人にも言うのだけれども、発達特性の人のスキルじゃなくて、相手側の人たちの研修会とか、先ほど丸木先生がおっしゃったように、グリーンリング。そこを具体的に、これはこれでスキルだけれども、やっぱりそこら辺をターゲットにするぐらいの具体論も必要なんじゃないのかなと思ったのです。

だから、もっと社会周知みたいな。障害といったものについての社会周知感とか。きょう、ジョブセンターの方から、本人の部分は出ているけれども、対会社についての困り感は絶対にあるはずだと思うのですよ。だから、そこら辺のところをもうちょっと意見してもらったほうが、なんか広がりが出てくるのかなと。もう実際、既存で動いていることがあって、多分その流れの中で、今、ここなのだというふうなのが事務局側の立ち位置もちょっと分かるのですが、でもあえてそう、どうですかねという感じです。

(朝日会長)

いかがでしょうか。

(渡辺副所長)

きょうはいろいろとご意見をいただきまして、ありがとうございます。このテーマ

を設定したのは、県がいろいろと幼児期から成人期まで支援していく際に、成人期のときに、もう少し、なんでもっと小さいときからこれができなかったのかなという思いがあってですね。やっぱり社会に出るためには、こういう人であれば社会でちゃんとできるのだから、そういうところでやっぱり支援者側も、小さいときからそういう目を持って、ご本人、親御さん、周りの方をそういうふうに導いていけばいいかなということ、ちょっともっと片側からの議論で非常に皆さんに分かりづらかったかと思うのですけれども。

皆さんへの周知については、それはそれで進めていまして。今週の月曜日も雇用促進セミナーというのを毎年やっているのですけれども。今年初めて100人以上の企業の方がおみえになって、発達障害者の雇用について、皆さん、それなりに興味を持って集まっていたできるようになりました。

障害者雇用の中でも発達障害は非常に遅れていた面があるので、これから多分企業の方も理解を深めて、発達障害者の方を戦力に必ずなりますので、そういうところはそういうところで進めていきたいと思っています。ジョブセンターのほうも今回はご本人側からの視点でお願いしたのですが、企業のほうも、どういうところで企業が困っているのかというのは、もう本当にそれはあれです。もしあれでしたら、次回はちょっとそっちの方の話をさせていただきながら両方も含めた形で議論を少し入れ込んだほうがいいのかというふうに思いましたので。

きょう、テーマを設定したのはそういう思いがあったので、もし小さいときから何とかなれば、そういう視点があれば、何とかなっただけではないかということで、ちょっと片側からだったのですけれども。もちろん周知はあらゆる方々が理解するのが生きやすさだとは思っていますので、この短い時間で議論をする一つのテーマとして、今回は提案させていただいたということですので。申し訳ありませんでした。ご理解ください。

(朝日会長)

よろしいでしょうか。では、これを糸口として全体像をきちんと見据えて対応していくということでございます。

それでは、一応きょう用意した内容は以上でございますが。特に皆さんのほうからご発言等はございますでしょうか。

(竹田委員)

ちょっといいですか。

(朝日会長)

どうぞ。

(竹田会長)

すいません。資料1として、埼玉県発達障害者支援地域協議会設置要綱というものを今回は出していただいているのですけれども。そのうちの8、その他というところに県教育局が設置する広域特別支援連携協議会と密接な連携を図るものとするというふうにあるのですが、実はこの広域特別支援連携協議会には JDDnet 埼玉が委員として参加をさせていただいていて。この数年、この会議がなかったものですから。私どもは関係があるので。今年度も所管課である特別支援教育課さんのほうに、この会議について実施があるのかどうかということを確認させていただいたところ、会議開催に予定はないというふうにはっきりとご回答をいただいているところです。

設置要綱にこのように記載されるに当たって、実施のない会議を記載するのはどうなのかと思ったので、そのことをお伝えさせていただきます。すいません。

(朝日会長)

これについては、よろしいですか。そういう、この要綱上の解釈で設置するとありますが、そこは行われていないということの確認ということです。他はよろしいでしょうか。

それでは、今後の進め方を、先ほども出ておりますが、それらも含めまして事務局にお返しをさせていただきたいと思います。私の取り仕切る部分は以上でございます。特にご発表いただきまして、ありがとうございます。熱心なご議論に感謝したいと思います。